

ルカの行伝演説記述⁽¹⁾

石 丸 新

使徒行伝に見出される「スピーチ」は、その契機、主題、スタイル、狙い、構成、分量において多様な側面を持っている。それぞれの情況に応じて、説教、説話、講話、弁明、弁証、弁論、演説、訓示などの訳語があてられるが、この全体をスピーチの枠内に収めるとすれば、その分量は行伝全体の三十五パーセントにも相当する。

行伝の使信・神学・思想の理解にとって、スピーチの果たす役割は大きく、特に、スピーチの配置は、行伝全体の構成を見て行く上で、重要な指針を提供している。専ら歴史家として捉えられ、評価されていたルカが、神学者ルカとして考察されるに至った経過には、かずかずの契機が考えられるが、詳説はさておき、一九五〇年以降の新約学界の大きな関心がルカ神学に集められていることは言を俟たない。ルカ行伝を貫く救済のテーマを究めんとする研究が、特に編集史への関心に即して、かず多く発表されている中で、行伝演説の類型・神学的テーマ・構造に触れるものも、かなりの数にのぼっている。これまでの行伝演説研究を概観する論文も少なからず見られる。

行伝演説に関するこれまでの研究の歴史を概観し、その中における、いわゆる保守派の流れを見定めた上で、行伝演説の配置とその狙いを考察し、行伝において演説の占める位置と意義とを明らかにしようとするのが、この小論の目的である。ただし、演説の個別研究に俟つべき部分が当然大きいので、本稿はごくおおざっぱな素描の域を出ない。

一 行伝演説研究概観⁽²⁾

行伝演説研究の歴史は、一九二〇年代の初めにまでさかのぼることができる。H・J・キャドバリーは、一九二二年に、ギリシャおよびユダヤ史家の歴史記述について論ずる中で、ツキジデスのスピーチ使用に触れ、古代史家が主要登場人物をして語らしめたと同様の手法をルカが採用して、ペテロ、パウロ等をして語らしめたとし、興味ある類比を提唱した。じっさいには語られることのない事柄を、ルカが創造力を駆使して、使徒たちをして語らしめ、それぞれの情況に適合させたと見るのがキャドバリーの所説の中心であった。

ドイツにおける行伝の批評的研究の筆頭者は、言うまでもなく、M・デイベリウスであるが、まとまった論文としては、「行伝演説と古代の歴史記述」が刊行されたのは、彼の死の翌々年、すなわち、一九四九年のことであった。これは、同じ題ですでに一九四四年になされていた講演に基づくものである。これに先立って、一九三九年に発表された論文「アレオパゴスにおけるパウロ」も、彼のスピーチ理解を示すものであるが、これらの講演・論文において結晶するに至った解釈原理の萌芽は、すでに、一九一九年の『福音書の様式伝承』、一九二三年の『使徒行伝様式批評』に見出されると指摘されている。デイベリウスは、行伝の著者がギリシャ史家の例に倣って、かなり自由に、スピーチを組み立てたと主張するとともに、福音書記者として、福音の伝承の枠内に、自分自身を制限して置く一面もあつたと言われる。従って、デイベリウスの研究課題は、何がルカの神学的洞察に基づくものであり、何が原初の信仰集団の伝承であるかを弁別することに集約されていた。

C・H・ドッドが一九三五年になした講演が、翌一九三六年に『使徒的宣教とその展開』として公刊されたが、その中でドッドは、ルカが控え目ながらツキジデスの手法を探り、語られた言葉どおりに記すことはしなかったが、原始信仰共同体の原初ケリユグマに帰せられている共通の枠組みに従っていることを主張した。おおまかに言って、行伝スピーチは、使徒たちの説教を想起して組み立てられており、アラム語を語るエルサレム教会の資料に基づいていると結論している。

ドッドの立場を受けて、行伝演説研究に重要な位置を占める講演をなしたのが、F・F・ブルースであった。一九四二年十一月に、「使徒行伝におけるスピーチ」と題してなされたティンダル講演は、翌一九四三年に、ティンダル・モノグラフのひとつとして刊行され、保守派の新約学界において、この問題に先鞭をつけた本格的な論文として尊重されることとなった。⁽³⁾ブルースは、明らかに、一九三九年のデイベリウスの「アレオパゴスにおけるパウロ」を意識し、これを、ドッドの線に沿って批判し、越えようとしたと考えられる。三十年を経た一九七四年に、ブルースは、レオン・モリス六十歳記念論文集『和解と希望』に、「使徒行伝におけるスピーチ——三十年後」と題する論文を寄せ、研究の動向を分析しつつ、明確にデイベリウスを批判する所説を展開している。特に、デイベリウスの一九四四年の講演「行伝演説と古代の歴史記述」が取り扱われる。ブルースの基本理解によれば、スピーチは、それぞれ的情況、場面に応じてじっさいに語られたことの眼目を伝達する要約である。

ドイツにおいて、デイベリウスの所説をさらに発展させ、行伝著者の神学理解の獨創性を主張したものに、P・フイールハウエルの「使徒行伝の『パウロ主義』について」(一九五〇年)、H・コンツェルマンの『時の中心』(一九五三年)、E・ヘンヒェンの『行伝注解』(一九五六年)が挙げられるが、これらはいずれも、ルカの神学的概念が行伝において占める重要性の見地から、行伝演説を扱っている。

文学様式の面から行伝演説の細密な分析を試みたのは、U・ヴィルケンスである。『使徒行伝の伝道説教——様式史・伝承史的研究』(一九六一年)でヴィルケンスの導き出す結論は、これらのスピーチは原初キリスト教神学を証しするものではなく、第一世紀末のルカの神学を表象するものであるということであった。ルカは、彼の受けた伝承から、統一ある神学的図式を創出したのだとヴィルケンスは主張する。E・シュヴァイツァーの立場も、ヴィルケンスと軌を一にしていると見ることが出来る。J・C・オニールの到達した結論も、原初の資料を用いたとは言え、ルカの記すスピーチは、ルカの神学的視点から構成されたというものである。

他方、保守的な立場から論じたものに、H・N・リダボスの「使徒行伝におけるペテロのスピーチ」⁽⁴⁾(一九六一年のティンダル講演、翌一九六二年にティンダル・モノグラフとして刊行)が数えられる。

ドッド、ブルースの線を受ける者に、I・H・マーシャルを挙げなければならない。F・F・ブルースの六十歳記念献呈論文集『使徒時代史と福音』(一九七〇年)に寄せた論文「使徒行伝における復活」の中で、マーシャルは行伝演説研究史を概観するとともに、おおむね、ブルースの立場を継承し、原始キリスト教会のケリユグマに根ざす行伝演説の基本的性格を明確に跡づけている。

行伝演説研究の動向を概説する者のうち、さらに、R・N・ロンゲネッカーを特記すべきであろう。注(2)に挙げた『使徒時代における聖書釈義』八〇〜八三頁において、ロンゲネッカーはキヤドバリー以降の主要論点を挙げ、特に、H・N・リダボスとC・F・D・モールに触れて、スピーチが原初の教団のキリスト論を保有するとの立場を打ち出している。

同じく注(2)に挙げたW・W・ガスキューの論文「行伝演説——デイベリウス再考」は重要な位置を占めている。ガスキューは、デイベリウス、シュヴァイツァー、ヴィルケンスの線に対して決定的なノーを唱え、行伝演説の

類似性を認めると同時に、その多様性にも着目すべきことを主張し、モールの指摘する行伝演説のキリスト論の多様性に論及しながら、スピーチの資料、伝承に注目させる。

S・S・スモーリーは、ルカの果たした要約と編集の働きを認めながらも、スピーチそのものの歴史性を弁証し、復活後のキリスト者共同体における原初のキリスト論的伝承を反映していると論じている。⁽⁵⁾

個々のスピーチについての文献は多岐に亘るが、たとえば、N・B・ストーンハウスの「アレオパゴス説教」(一九四九年七月十三日のティンダル講演)では、A・シュヴァイツァーおよびM・デイベリウスの解釈に触れた後、アテネ訪問の歴史的背景に即して、綿密な釈義的研究が展開され、スピーチ解釈の原理が提示されている。

W・バークレーは、パウロの伝道説教と教会に対する説教の比較を試みて、興味ある研究を展開している。⁽⁷⁾ 伝道説教として採り上げられるのは、ピシデヤ・アンテオケ、アテネ、ルステラであり、それぞれの説教のアプローチとパターンが論じられる。なお、バークレーの狙いとするとところを、実践神学の視点から、釈義的に論及したものに、J・E・アダムズの一書があり、⁽⁸⁾ アンテオケ、ルステラ、アテネ、ミレトでの説教の他、エルサレムの群衆、サンヘドリン、ペリクス、フェスト及びアグリッパに対する弁論が採り上げられる。

特に、使徒行伝二章と三章を扱ったものに、注(2)に挙げたR・F・ゼインレの『ペテロのペンテコステ説教』がある。第一章では、両説教の文学的構成が、綿密な釈義を基礎にして展開され、行伝四章、五章、一〇章、一三章の説教にも触れながら、その特質と狙いが明らかにされる。第二章では、スピーチとルカ行伝の思想内容が主要モチーフに従って詳述される。著者のテーゼを展開する第三章「行伝の構造におけるスピーチ」では、ペンテコステ説教が行伝全体を規定する基調講演であるとされ、行伝三章の説教はユダヤ人に対する初期の説教の見本に見立てられる。本書の副題「行伝二章及び三章のペテロの説教における伝承とルカの再解釈」が物語るとおり、著者は原初の信

仰集團のケリュグマに現されている初期の神学の発展を、ルカの神学的視座との関わりにおいて論じている。

行伝演説の研究は、行伝の構造と神学に関わるのみでなく、行伝からさかのぼって、ルカ福音書の研究にまで及ぼされるべきであるとの、A・J・ハルトグレンのアプローチは、注目すべき鋭さを持っている。⁽⁹⁾ 行伝のスピーチ構成からルカ福音書を見るといって、一見奇異に感じられる方法は、確かな説得力に富んでいる。

以上、行伝演説研究の概観を試みたわけであるが、演説を骨格とする使徒行伝の構成からすれば、本書を *The Acts of the Apostles* ではなく、*The Speeches of the Apostles* として見るべきであるとの大胆な言い方も、決して無理ではないことが諒解されてくる。この点については、次項で、ルカ福音書の説教と行伝演説とを対比する中で少しく触れることとする。

二 行伝演説の種類と配置

たとえば、ペテロのペンテコステ説教と、パウロのピシデヤ・アンテオケ説教を見る時、そこには、驚くべき類似性が認められる。ダビデへの言及は言うまでもなく、全体の構成が、神の救いの計画の成就という大筋に支配されていることが共通の特色である。さらに、ペテロ、ステパノ、パウロの説教に共通して見られるイサエルの概観は、この終りの時におけるイエスの生・死・復活・高擧へと連なっていく。

行伝演説配置の巧みさは、演説の種類の変遷とあいまっている。ペテロ、ステパノ、パウロというスピーチによって、類型が自動的に決まるわけではない。それぞれの要素と狙いを持つスピーチが、まさにふさわしい場所に置かれて使徒行伝が組み立てられているさまを一覧すれば次のとおりである。

〔ペテロ〕

- (1) 二・一四〇三六 ペンテコステ
- (2) 三・一二〇二六 ソロモンの廊で
- (3) 四・八〇一二 議会の前で
- (4) 五・二九〇三二 同 右
- (5) 一〇・三四〇四三 コルネリオに

〔ステパノ〕

七・二〇五三 議会で大祭司に

〔パウロ〕

- (1) 一三・一六〇四一 ピシデヤ・アンテオケ
- (2) 一四・一五〇一七 ルステラ
- (3) 一七・二二〇三四 アテネ
- (4) 二〇・一八〇三五 ミレト
- (5) 二二・一〇二二一 エルサレムで群衆に
- (6) 二三・一〇七 議会の前で
- (7) 二四・一〇二二一 ペリクスへの答弁
- (8) 二五・八〇一〇一 フェストへの弁明
- (9) 二六・一〇二二三 アグリッパへの弁明

行伝演説がすべて伝道説教のタイプに入るわけではない。対ユダヤ人、対異邦人という、対象の別による狙いの違いもあり、同じ伝道説教の中でも、伝道説教の前段階と目されるものもある。概して言えば、ペテロの(1)と(5)は、ユダヤ人が十字架につけたイエスをキリストであるとの、原初のケリユグマを映し出している。(1)と(4)がユダヤ人に向けてなされたものであるのに対し、(5)は、「信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈をしていた」(二〇・二)者であるとは言え、異邦人に向けてなされた最初のものである。

ステパノの説教は、伝道説教とはいえない。一般に、ステパノの説教と言いならわされているが、じつさいは、議会に対する弁明であり、最終的には、イエスをメシヤとして認めることをしないユダヤ人への糾弾となっている。イスラエル史を回顧するステパノのスピーチは、救済史の提示と解釈に基づいて、正しいかた、すなわちメシヤ・イエスを提示する一大神学論文を成していると言うべきであろう。

パウロの(1)と(3)は、明らかに伝道説教である。(1)がユダヤ人を対象とするのに対し、(2)と(3)は、異邦人に向けて語られている。いずれも、偶像礼拝の定罪という形をとって、真に拝すべき生ける神に立ち返るべきこと、すなわち、悔い改めの要請を強調するのが特徴である。(2)のルステラ説教が、イエスの出来事、すなわち、イエスの生と死と復活を語らないところから、これをプレ・エヴァンジェリズムと呼ぶ場合がある。しかし、神に立ち返ることは、イエスの贖罪をおり得ないこともまた明白である。唯一の生ける真の神のみ在すことを知るユダヤ人には、イエスのキリストたることを宣べ伝えることが求められるが、異邦人には、ユダヤ人が既に告白していること、すなわち、創造者であり、歴史の支配者にいます神の生きて働きたもうことが先ず教えられねばならなかった。

パウロは、ただ、淡々と語るのではない。特に、ルステラにおいては、人間を神とするさかさまの考えに対し、怒りと憤りをもって語る。根強く執拗な偶像礼拝に対して、それが死に至るべき誤りであることを明白に指摘する。

「ルカが使徒行伝を書いていた時、教会はパウロの時代のように、会堂とつながりを持っていた異邦人を招いていたのではなく、純血種の異邦人を引き入れんとしていたのであるから、宣教説教の出発点は、異邦人の聴衆がユダヤ人の如く、唯一神の前提を持っているとか、旧約聖書の証拠聖句が適切であるとかいうことではあり得なかった」と、S・G・ウィルソンの指摘するところは当を得ている。⁽¹⁰⁾

(4)のミレトでの説教は、訓示と呼ぶのが適切であろう。伝道者パウロの自己弁明と、エペソの長老たちへの励ましは、やがて展開されるべきパウロ書簡の内容を、この時、早くもパウロが先取りして語ったものと考えることができ。この意味で、このミレトでのスピーチは、「パウロ書簡のミニチュア」とよばれる。

行伝二二章から二八章までは、パウロの弁明で貫かれる。(5)～(9)の演説は、弁論であり、この弁論をとおして、パウロ自身の神学を表述することをルカは明らかに意図している。裁判の場のことであるから、パウロが、「わたしは」と第一人称で語ることは、事の当然であると言え、この「わたしは」をもって、パウロの神学を表明し、同時に、原始キリスト教会における、パウロの伝道者、また神学者としての卓越した位置と意義を明らかにしようとするのが、ルカの狙いでもあったことが、無理なく想定される。

これらの弁論について、卓越した議論を展開するのは、J・ジャーヴェルである。ルカ＝行伝のテーマを追究する『ルカと神の国』で、彼は三十頁を費やして、パウロの弁論を取り扱っている。⁽¹¹⁾

特にパウロのスピーチについて言えば、伝道説教にせよ、教会に対する建徳を旨とする訓話にせよ、弁論にせよ、後のパウロ書簡と著しい類似性が注目される。たとえば、行伝一四・一五は第一テサロニケ一・九との対応で理解されるべきであるし、行伝二三・六および二六・五は、ピリピ三・五と符合する。

行伝演説の理解にとって重要なことは、演説の惹き起こす結果である。演説の適切な配置は、全体の叙述に変化を持たせるといふ、単に修辞学上の効果を狙ったことではない。演説が基本的にケリユグマである限りにおいて、それは福音そのものの受容あるいは拒絶の反応を産み出さずにはおかない。演説を契機とするユダヤ人の責任追及は、二章、三章、四章、五章の説教において著しい。「あなたがたが木にかけて殺したイエスを神がよみがえらせて、主またキリストとしてお立てになった」(二・二三、三六、三・一五、四・一〇)と宣言する時、ユダヤ人の福音拒否は次第に昂まりを見せて行く。四章以下では、このエルサレムの敵意が次第にのりさまが生き生きと描写される。民の指導者のレベルでの敵意は(四・一二、五・一七、二六)、やがて、民全体のレベルでの敵意となり(六・一二)、この勢いは、遂にステパノの殉教へと向かって行くこととなる。ステパノ物語は、エルサレム全体としての福音拒否を、要約の形で裏書きするものとして、ルカによってこの場所に置かれている。このステパノの殉教の結果、使徒以外の者はことごとく散らされて行くこととなる。サマリヤ、ユダヤ、ガリラヤ、さらに小アジア南部へと福音が広められて行くこととなった契機は、明らかに、エルサレム全体としての福音拒否にあった。

この拒否を決定づけるものが、ステパノの演説であったことは言を俟たない。行伝中の他のどのスピーチにもまさるスペースをステパノ演説に割いている事実からも、ルカがどれほどこのステパノ演説の果たした役割りを重視したかがうかがえる。ペリクスに対するパウロの説明を、「正義・節制・未来の審判などについて」(二四・二五)と、はし折って記すのと鋭い対照をなしている。

ステパノ演説は、たしかに、形式においても、内容においても、ペテロ、パウロのスピーチと異なるが、ステパノの神学は、行伝の神学の全体のスキームと合致する。すなわち、神の民＝教会にかかわる神の目的が、歴史の中でいかに展開され、実現されるかを示すのが、ルカが行伝著作の目標なのである。モーセを拒否したことに始まるイスラエルの罪は、メシヤ・イエスを十字架につけることにおいて明白になり、さらには、ステパノを殺すことにおいて決

定的となるに至った。悔い改めの招きの拒否、ひいてはステパノ殺害の拳に出たことは、福音がユダヤ人から異邦人へと向かう契機を十分に備えることとなった。

かくして、行伝一・八「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」との約束が、福音宣教の進展の歴史の中で、ユダヤ人の福音拒否、異邦人の福音受容という、おおまかな筋を辿りながら成就され、ついに、パウロのローマでの宣教に到達する。

ピシデヤ・アンテオケでのユダヤ人による福音拒否は、同様に、イコニオム、ルステラ、ギリシヤの諸都市、さらには、ローマにまで至る異邦人伝道を正当化する契機として描かれている。「さあ、わたしたちはこれから方向をかえて、異邦人たちの方に行くのだ」(一三・四六)とのパウロとバルナバの宣言は重い。「エルサレムからローマまでの広がりかバーする行伝は、スピーチの惹き起こすユダヤ人の福音拒否を契機としながら、異邦人に受容されて行く福音の進展を描き出し、「神のこの救の言葉は、異邦人に送られたのだ。彼らは、これに聞きしたがうであろう」(二八・二八)との、ローマにおける最終的宣言にまで至る。この宣言は、アンテオケでパウロとバルナバが明言した主の命令「わたしは、あなたを立てて異邦人の光とした。あなたが地の果までも救をもたらすためである」(一三・四七)との対応において捉えるべきであるし、内容的には、その成就として読み取るべきである⁽¹²⁾。

スピーチは、この進展の節目(ふしめ)の役を果たす。そして、実質的には、キリスト教のユダヤ教からの決定的な分離を証言して行く⁽¹³⁾。

次に、演説の配置について見るならば、第一に注目されるのは全体を通して見られるペテロとパウロのバランスである。ペテロの五に対して、弁論を除くパウロのそれは四である。ルカのルカ行伝記述で特筆されるいわゆる「二重表現」は、大きな眼で見れば、このペテロとパウロのバランスにも妥当する。分量的なバランスという点では、

P・シューベルトが指摘するように、一章から二〇章までの部分で、ペテロに帰せられる演説部分が六十節であるのに対し、パウロに帰せられるのは五十九節である⁽¹⁴⁾。

ただに、バランスのみならず、ペテロとパウロの同一性が指摘されねばならない。先に触れたように、ペテロのペンテコステ説教とパウロのアンテオケ説教との間に見られる極度の類似性は、そのままに、原始キリスト教のケリユグマとパウロの宣教内容に共通の枠組みの存在を裏書きしている。第一コリント一五・三で、「わたしが最も大切なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであつた」とパウロが明言することは、エルサレムの原使徒団との同一の視点、共通の福音理解を証しする⁽¹⁵⁾。後の一群の書簡における教理的表現は、たしかに、パウロへの高筆者イエスの啓示によるものであるが、それは、いずれも、キリストが聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死に、葬られ、三日目によみがえり、現れたという、原初キリスト者信仰集団の信仰の定式に基づくものであつた。

第二に挙げるべきは、演説の持つ、対ユダヤ人、対異邦人の両面の意義である。これについては、ユダヤ人の福音拒否が異邦人伝道への契機を提供したという面からすでに触れた。しかし、別の面からの考察も公平になされる必要がある。すなわち、ルカは、演説を契機として福音を拒むユダヤ人を描くのみならず、演説をとおして、メシヤ・イエスを受け容れるユダヤ人も描く。三千人のバプテスマを見たペンテコステ説教はその典型であるし、四・四、五・一二―一六、九・二六―二八、二一・二〇なども、この線に沿って捉えられる。

ペテロは、ユダヤ人に語るのみならず、異邦人コルネリオにも語る。パウロは、ピシデヤのアンテオケで、ユダヤ人と異邦人の両方に語る――「兄弟たち、アブラハムの子孫のかたがた、ならびに皆さんの神を敬う人たちよ。この救の言葉はわたしたちに送られたのである」(一三・二六)。ルステラ、アテネでは聴衆は異邦人であるが、ルステ

ラの場合には、いわゆる俗信、迷信に陥っている異邦人をより宗教的な見地から見ると対して、アテネでは、新しいものに関心を集める知的な異邦人に、より哲学的なアプローチをもって語りかけている。

第三には、ルカ福音書におけるイエスの説教の取り扱いと、行伝における演説配置の対応である。ルカ四章のナザレ説教と、行伝一三章のアンテオケ説教との対応は、いずれも会堂での説教であるという設定を越えて、救済史の展開という主テーマにおいて認められる。イエスにおいて、旧約聖書の預言が成就した時、ユダヤ人がイエスを拒否して丘から突き落とそうとした事実は、バルナバとパウロが旧約聖書の成就としてのメシヤ・イエスを宣べ伝えた時に、ふたたび町から追放したことと対応している。

配置から見ると、福音書では、四章にナザレ説教、六章に平地での説教が置かれ、九章五一節から一八章一四節までの大挿入部分は、イエスの教えの大規模な集成であり、さらに、二一章には、終末論説教が置かれる。特に、四章のナザレ説教は、イエスの活動を描く第一部の冒頭で早くも顕著にされた拒否の事実を導き出すし、第二部の冒頭では、同じく、サマリヤ人の拒否が浮き彫りにされる(九・五一―五六)。第三部の受難物語は、最終的な拒否の事実を鮮明に描き出す。

この拒否のモチーフがそのまま流れ込んだのが行伝である。ルカによれば、イエスはユダヤ人に拒否される預言者である。この預言者リメシヤなるイエスによる救いの使信をもたらす者は、ステパノであれ、ペテロであれ、パウロであれ、みな激しく迫害される。しかし、その使信は、拒否と迫害にもかかわらず進んで行く。このことは、度重なる拒否にもかかわらずエルサレムをさして進んだイエスの足どりに似る。

行伝に配置されたスピーチは、それを契機とする人々の反応を伴いつつ、一貫して、イエスの支配の姿を描き出す。大いなる二重構造と称されるルカ伝と行伝の二部作は、イエスが行い、また教えはじめてから天に上げられた日

までのことと、イエスが聖霊によって使徒たちと教会をとおして行い、教え続けておられることの両方を包み込んでいる。この継続するイエスのわざは、明らかに、人を分けて行くわざである。旧約聖書の「贖い」が、ある意味では、「区別」を示すことも鮮やかに示されたのは、紅海での出来事であった。乾いた地を通るが如くにして対岸に着いたイスラエルは、海べに打ち上げられたエジプト人の死体を見た。これこそ、主がイスラエルとエジプトとを区別された大いなるみわざであった(出エジプト一四・三〇―三二)。

メシヤ・イエスは、この区別のわざをなすお方であるというのが、シメオンの預言である――「ごらんなさい。この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています」(ルカ二・三四)。神の国の宣教をとおして人を分けるメシヤのわざは、やがて麦と毒麦が分けられて決定的な審きを受けるかの日に到る。この日をさして、福音への応答という、「きょう」の決断を要請するイエスは、使徒たちのスピーチをとおして働く。

三 行伝説教の構造と主要モチーフ

行伝二二章以下のパウロの弁論をひとまず外して、二章から一七章までのスピーチに限って見るならば、行伝スピーチからさかのぼってルカ伝の構造を見ようとするハルトグレンのアプローチに学ぶところが大きい。以下、彼の分析にしたがって四つの類似点を挙げることにする。⁽¹⁵⁾

(一) どのスピーチも、旧約聖書からの引用あるいは言及を有するか、そうでない場合には、少なくとも、旧約聖書に基づいた贖罪史を含む。これらは、キリスト論的ケリュゲマの冒頭あるいは末尾に置かれる(二・一六―二二、三四以

下、三・一三a、二二・二五、四・一一、五・二〇、一〇・四三、一三・一七、二二・三三、三七、四一)。同様に、福音書では、聖書の引用あるいは言及は、前に置かれる場合(生誕物語、ナザレ説教)と、後に置かれる場合(受難物語、復活後の顕現記事)とに分かれる。

(二) 行伝説教では、イエスの死を招来したのは、聖書を悟らず、神によって委託されたイエスの使命に反対するイスラエルの権威者であり、彼らのわざは、神の計画が成就されるべき手段でもあったことが示される(二・二三、三一八、四・一一、一三・二七、二九)。同様に、福音書では、イエスに反対するもろもろの企ての背後にいるエルサレムの権威者を描き出す(二・六六、二三・五、一〇、一三、一八、二五)。しかし、イエスの死によって、神の計画は実現する(二四・二五、二七、四六以下)。

(三) 行伝では、イエスの生涯は聖霊によって導かれたと語られる(一〇・三八)。イエスには神の力が付与されていた(二・二二、一〇・三八)。同様に、福音書でも、イエスには聖霊が宿っており(四・一、一四、一八)、力が与えられていた(四・一四、三六、五・一七、六・一九、八・四六、九・一)。

(四) すべての出来事は悔い改めと罪の赦しをもたらすために、宣べ伝えられねばならない(三・一九、二六、五・三一、一〇・四三、一三・三八)。同じことが福音書の結語としてあらわれている(二四・四七)。

以上のハルトグレンの指摘に従って、行伝からルカ伝にさかのぼり、さらに行伝に戻って来る時、我々は説教の構造の類似を再認識させられるとともに、ルカ行伝を貫くルカのスキームと、整然とした叙述に驚かざるを得ない。行伝説教では、聴衆に適合した形で語るといふ実際の配慮に伴うアプローチが顕著である。しかし、説教の内容について言えば、その情況の下で語り得る範囲の差はあれ、そのめざすところは、神のみむねの総体を示すことであった(二〇・二七 *καὶ αὐτὰς βουλήν τοῦ θεοῦ*)。これはすなわち、神の定めた計画であり(二・二三 *ὑποπέθεν βουλήν τοῦ θεοῦ*)、

この神のみむね、ないしは計画の多面的展開を叙述することが、ルカの二部作の目的とするところであった。ルカの神学が「みむねの神学」と呼ばれる所以である。

行伝説教は、いずれも救済史的構造を持つ。神の恵みによる救いのみむねが歴史において実現して行くありさまを、ルカはスピーチの巧みな配置をもって明らかにせんとする。ルカが序文の中で、「順序正しく」書きつづつてと言うのは、神のみむねの実現を神学的に理論づけて提示するということにほかならない。

以上考察して来た行伝説教の構造は、いくつかの顕著なモチーフによって支えられている。既に触れた部分との重複を恐れず、以下四点を挙げることにする。

(一) 旧約聖書の成就　ルカの神学が「みむねの神学」と呼ばれることは、内容的には、それが成就の神学であることよって裏打ちされる。行伝説教の第一の要素にこの預言の成就を挙げるべき理由は、先に述べたように、いずれの説教も、旧約聖書引用、あるいは言及、または旧約聖書の救済史を含むという事実に存する。「預言からの証明」の原理が明らかに働いていることがそれぞれの説教において認められる。新約文書が流布される前に、原始教会に通用していたと想定される『証言書』(テストイモニア)の影響が説教に現れていると判断する者は少なくない(ロンゲネッカー、トロクメ、ブルース等)。

ルカの多用する *dei* は、*βουλή* との関係でこそ生きて来る。ルカ行伝を通じて *dei* が用いられるのは四十四回とされるが、全新約聖書の用例が一〇二回であることからしても、ルカの強調するところが容易に認められる。*dei* と *βουλή* の併用、さらには *dei*, *βουλή*, *ἐπιθυμία* のトリオがルカ文書には顕著である。

(二) キリストの生・死・復活・高挙の提示　行伝説教の中心部をなすが、このイエスの出来事にほかならない。説教の中でこの第二点が展開される時、そこには、しもべとしてメシヤのわざを成就するイエスの姿が浮き彫り

にされる。イエスのかず多くの奇跡は、「神が彼をとおして」行われたものであり、そのことによって、ナザレ人イエスが「神からつかわされた者であること」が示されたとあかしされている(二・三三)。ソロモンの廊でのペテロの説教の中では、「その僕イエス」と呼ばれる(三・一三、参照三・二六)。

このイエスがキリストであることは、神がイエスを死人の中からよみがえらせたことにおいて疑うべくもなく明らかである。使徒たちは証言する。神は、イエスをよみがえらせるばかりでなく、神の右に高く挙げることによって、主としてお立てになった(二・三六)。ルカのキリスト論のひとつの特質は、高擧者イエスに光を当てようとする試みにある。イエスの生・死・復活・高擧を内容とするケリュグマは、「イエスは主である」との告白に集約される。そして、これこそが、原始キリスト教会の「ことば」にほかならない。

イエスは、ご自身の宣べ伝えていたのと同じ「神の国」を宣べ伝えることを十二弟子に託した(ルカ九・二)。ペテロとヨハネとが、「僕たちに、思い切つて大胆に御言葉を語らせて下さい」(行伝四・二九)と祈り求めたその「御言葉」は、「神の言」(行伝四・三一)、すなわち、神のみむねによって惹き起こされた恵みのわざのことばであった。神の言はすなわち「福音の言葉」(行伝一五・七)であり、「この救の言葉」(行伝一三・二六)であるとともに、究極的には、「神のこの救」(行伝二八・二八)そのものである。

(三) キリストによる審きと罪の赦しの宣言 キリストの事実の提示は、キリストの審きの前に人を連れ出す。イエス自身において、神の国の宣教が神の国の説明に終始せず、むしろ、神の国への招きであり、神の国への決断の要請であったように、行伝説教でも、イエスの出来事の提示は、このキリストによる罪の赦しの宣言を伴って、聞く人の魂に迫って来る。ソロモンの廊での説教で、ペテロの言うところ(三・二六)、コルネリオへの説教で、ペテロの強調するところ(二〇・四二、四三)は、パウロにおいても同様に、ピシデヤ・アンテオケ、アテネにおいて明白にあかし

される。特に、アンテオケでは、「このイエスによる罪のゆるしの福音」(一三・三八)が宣べ伝えられ、「信じる者はもれなく、イエスによって義とされる」(二三・三九)と宣言される。信仰義認のモチーフが、パウロ書簡を先取りする形ですでに現れているを見る。

(四) 悔い改めと信仰の勧め 行伝説教の結語として現れる悔い改めと信仰の招きは、ルカのスピーチ使用の独自性を雄弁に物語る。行伝の宣教説教は、ユダヤ・ギリシヤ史家のスタイルと、この点において決定的な違いを見せる。ここには、史家を越えた、福音書記者としてのルカの面目が躍如としている。

この悔い改めの招きについて綿密な議論を展開するのは、前に触れたゼインレである。行伝三章の説教が行伝全体に果たす役割りは、この悔い改めの要素の強調であるというのが彼の主要テーゼである。三章の説教はイエスのメシヤたることと、悔い改めの必要を主たる内容とする、ユダヤ人に宛てて語られた宣教説教のサンプルを成している。キリストの受難が預言者によって予告されていたとおりに成就したと、神のわざを告知したのに続いて、ペテロは、「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」(三・一九)と、せつに勧める。この勧めは、さらに結語(三・二六)によって補強される。さらに、この悔い改めは、主のみ前から慰めの時に来る、かの大いなる日をめざすものとして、大きな射程の中で勧められる(三・二〇、参照第二ペテロ三・八、一三)。

行伝三章の悔い改めは、ユダヤ人が無知のゆえに、いのちの君を殺した(一七節)との言明と結びれて、悔い改めの可能性を指摘するのみならず、その必然性を強調する。さらに、このイエスが万物更新の時まで、天にとどめておかれる(二二節)ことは、この終りの時に至るまでの宣教の必要性と重要性を示唆する。預言者の宣べた、終りの決定的な審きに備える悔い改めは、今の時に、イエスのなし続けておられる悔い改めの招きを聞くことから始まる。行伝三章および七章に見えるモーセのタイポロジー(予型論)は、イエスが終末的預言者たることの側面を明白に証言し

ている。預言者たるメシヤの再臨については、より発展した教理の形をとって、パウロ書簡に現れるが(たとえば第二テサロニケ一・一〇、二・一九、三・一三)、行伝三章に関する限り、注目すべきは、高く挙げられ、天にとどめおかれているイエスが、いまも、弟子たちをとおして、悔い改めのメッセージを宣べ伝え続けておられるというところである。この悔い改めの使信は、最後のメシヤの時に至るまで、人々に決断を要請し続ける。

注

- ① 本稿は、一九七七年四月二十九日、日本福音主義神学会西部部会(於大阪基督教短期大学)でなした「ルカの行伝演説配置の手法」と題する研究発表の草稿、ならびに、一九七七年六月二十日、改革派北四国神学研究會(於日本基督教改革派高松教会)に提出した資料(同研究会資料集第二号一〜一六頁)に、加筆し、修正を加えたものである。
- ② 行伝演説研究を歴史的に概観するものとして、特に以下を参照した。Richard N. Longenecker, *Biblical Exegesis in the Apostolic Period*, Grand Rapids, 1975, pp. 80-83; F. F. Bruce, "The Speeches in Acts—Thirty Years After," Robert J. Banks (ed.), *Reconciliation and Hope: New Testament Essays on Atonement and Eschatology* (Festschrift for Leon Morris), Grand Rapids, 1974, pp. 53-68; R. F. Zehnle, *Peter's Pentecost Discourse: Tradition and Lukan Reinterpretation in Peter's Speeches in Acts 2 and 3*, Nashville and New York, 1971, pp. 13-17; I. Howard Marshall, "The Resurrection in the Acts of the Apostles," W. Ward Gasque and Ralph P. Martin (ed.), *Apostolic History and the Gospel*, Exeter, 1970, pp. 92-95; G. N. Stanton, *Jesus of Nazareth in New Testament Preaching*, London, 1974, pp. 13-30; W. Ward Gasque, "The Speeches of Acts: Dibelius Reconsidered," *New Dimensions in New Testament Study*, Grand Rapids, 1974, pp. 232-250.

なお、行伝演説の理解にあたって、注解書の中で特にスピーチに触れ、付論の形で論じているものがある。以下に負(ペトリ)が大寺の『荒井 謙』『使徒行伝・上巻』新教出版社、一九七七年、一八〇〜一八四、二五四〜二五七、三七三〜三七五頁、F. F.

Bruce, *The Acts of the Apostles*, Grand Rapids, 1953, pp. 18-21; R. P. C. Hanson, *The Acts*, Oxford, 1967, pp. 35-39; 藤籥美『使徒の働き』『新聖書注解・新約』のちのち社、一九七三年、六〇頁。

以上のほか、次の文献より多くの示唆を得た。H. コンニホルメン『新約聖書神学概論』田川建三・小河陽訳、新教出版社、一九七四年、特に一〇〜一一頁、E. [Franklin, *Christ the Lord: A Study in the Purpose and Theology of Luke-Acts*, London, 1975; T. F. Glasson, "The Speeches in Acts and Thucydides," *ExPT*, 76, 1964-65, p. 165; D. Guthrie, *New Testament Introduction*, London, 1970, pp. 359-363; I. H. Marshall, *Luke: Historian and Theologian*, Grand Rapids, 1974; J. C. O'Neill, *The Theology of Acts in Its Historical Setting*, London, 1970; J. A. T. Robinson, *Twelve New Testament Studies*, London, 1965, pp. 139-153; E. Schweizer, "Concerning the Speeches in Acts," L. E. Keck and J. L. Martin (ed.), *Studies in Luke-Acts*, Nashville and New York, 1966, pp. 208-216; N. B. Stonehouse, *The Witness of Luke to Christ*, London, 1951; ヌ・ロッセ『使徒行伝の歴史』田川建三訳、新教出版社、一九六九年。

③ F. F. Bruce, *The Speeches in the Acts of the Apostles*, London, 1943.

④ H. N. Ridderbos, *The Speeches of Peter in the Acts of the Apostles*, London, 1962.

⑤ Stephen S. Smalley, "The Christology of Acts again," B. Lindars and S. S. Smalley (ed.), *Christ and Spirit in the New Testament*, Cambridge, 1973, pp. 79-93. 特に十九頁註三に「スピーチに関する文献が列挙されている。『使徒行伝』のキリスト論』と断るが、彼の先に発表された論文を改題して論じているものがある。また、その中で、"The Christology of Acts," *ExPT*, 73, 1961-62, pp. 358-362. の初めの論文の第一章の標題が「スピーチ」である。

⑥ Ned B. Stonehouse, "The Areopagus Address," *Paul before the Areopagus and Other New Testament Studies*, Grand Rapids, 1957, pp. 1-40.

⑦ William Barklay, "A Comparison of Paul's Missionary Preaching and Preaching to the Church," Gasque and Martin, *op. cit.*, pp. 165-175.

⑧ Jay E. Adams, *Audience Adaptations in the Sermons and Speeches of Paul* (*Studies in Preaching*, Vol. 2), Nutley, 1976.

⑨ Arland J. Hultgren, "Interpreting the Gospel of Luke," *Interpretation*, 30, 1976, pp. 353-365.

⑩ S. G. Wilson, *The Gentiles and the Gentile Mission in Luke-Acts*, Cambridge, 1973, p. 216.

⑪ Jacob Jervell, *Luke and the People of God: A New Look at Luke-Acts*, Minneapolis, 1972, pp. 153-183: "Paul: The Teacher of Israel—The Apologetic Speeches of Paul in Acts."

⑫ 二八・二八の協会訳で「救の言葉」と訳されている箇所は、原文では「救」であり（新改訳、塚本訳、荒井訳〔講談社版〕、文語訳も「救い」と訳す）、当然、一三・四七と整合する。

⑬ 決定的な分離の例として、エ・ペンにおけるパウロの宣教と、それが惹き起こした結果を挙げることでできよう。心の硬化、不信のゆえにこの道を受け容れようとしない人たちから離れ、パウロは弟子たちを引き連れて、シラノの講堂で論じていることとなる。ユダヤ会堂とシラノの講堂との対比は巧みである（一九・八一―一〇）。

⑭ Paul Schubert, "The Final Cycle of Speeches in the Book of Acts," *JBL*, 87, 1968, p. 3.

⑮ さらに「ガラテヤ一・一八」わたしはケンをたずねて」を参照しなればなる。コリド言われる *ετοροφῶσαι Κηφῶν* は「テロに問うて情報を得ること、調査をすること」を意味している。F. F. Bruce, *Paul and Jesus*, Grand Rapids, 1974, p. 51 参照。

⑯ ハルトグレン、前掲論文三五四―三五六頁。

⑰ ゼインレ、前掲書四三、七一―七五、九二―九四、一三一―一三五頁参照。

（四国学院大学教授）